

巻頭言

ことばの壁

佐久間 貞行

言葉がなければ、コミュニケーションが基本である医療は成り立たない。しかし最近改めて医療における言葉の壁を痛感している。

今がん検診の報告をどのような姿にすべきか模索中である。検査のコースの終わりに画像を提示しながら説明するときには、お互いに顔が見えるので、お互い理解しているかどうかを確かめながら話を進めることができる。報告書はその後に送付するのだから、日頃使っている用語で良いのではないかと考えていた。しかし反応は違っていた。判りづらいというのである。しかし健康診断の検査所見に異常がある場合、医療機関を受診する必要がある。そのときこの報告書を役立てて貰うことを考えていた。どちらかといえば医療用語を使っても両立出来るのではないかと考えて報告書を作っていた。

放射線科の業務の一つに、依頼された画像診断の結果を報告する仕事がある。それを受けて、医学放射線学会の中に画像診断報告書研究会がある。検査依頼も検査報告も、ほぼ同じ教育をうけて医療を行う医師同士である。お互い肝心なところは医療用語を用いるほぼ共通の言語環境である。いかに複雑な内容を述べるにしても、理解しあえることが可能な事が多い。理解できないことがあるとすれば略語位である。同じスペルでも専門領域によって意味が異なる略語が多くあるからである。したがってこの方面の言葉に対する取り組み方は全方的に理解するシステムより、むしろ結果をデータベース化して疾病や所見の分析に役立てるシステムを考える事に向かっている。「自然言語処理技術を取り入れた新しい画像診断レポート作成支援システム」(1989年 池田・佐久間)などはその1例である。

医療ばかりでなく各ジャンルにも用語がある。用語の意義はそれぞれ内容が定義されていることである。もし用語を分かり易い言葉に翻案すれば用語の定義を記述に使う必要があり、長い文章になる。まず文章の美しさを求めること

は難しく成るであろう。簡便な手としては括弧書きにするか、脚注にすることが考えられる。しかしこれでは読み辛い。

最近では診療録の開示も考えて、第三者にも判る文書がカルテに要求される。最近の電子化の波に、医用画像もカルテや報告書も晒され、制度上も電子化が当然になってきている。そして医療の透明化、標準化というモットーや、患者中心の連携型医療情報システム(HER)とのかけ声の内容として、言葉が簡素化、整理されてきている。その内容は HL7v.2.5 などの患者基本、検査結果、処方などの情報についてである。しかし診療録の開示によって、患者とデータを共有することにはなっても、理解を共有することにはならないようである。それはこれが目的にはなっていないようだからである。

これから理解を広く共有できる言語を開発する必要がある。検診後画像を CD に納めて被検者に手渡しているが、その経験から、もし報告書が電子化されてもよくなれば工夫し甲斐があり新しい手法の開発が可能で、どのような立場でもより正しく理解しあえる言語システムが出来る気がしている。

(名古屋大学名誉教授・財団理事)